

C-07-5

自己実現の欲求に着目した介入で易怒性が改善した一例

¹木沢記念病院リハビリテーションセンター, ²木沢記念病院中部療護センター
○青木智子¹, 丹羽志保¹, 吉池佳代², 和田哲也², 西村和好¹, 槇林優²,
織田恵理子², 奥村歩², 篠田淳²

【はじめに】前頭葉機能障害により易怒性や攻撃性が高くリハビリ実施困難な患者に対し、「リハビリが終わったらおやつを食べましょう」という促しをよく耳にする。これは欲求段階仮説では低位で物質的である生理的欲求に働きかけリハビリを実現させようという試みである。しかし、重度前頭葉機能障害患者にはこのような促しも困難なことは少なくない。今回、我々は欲求段階仮説で生理的欲求より高位に位置する自己実現の欲求に着目し、リハビリへの動機付けを行った結果、易怒性などが改善し訓練可能となった症例を経験したので報告する。【症例】H17.6に頭部外傷受傷、四肢麻痺、重度高次脳機能障害を呈した21歳の男性。5ヶ月後、当院入院。リハビリ時に殴る・蹴るなどの暴力行為が見られ、リハビリ実施が困難であった。また、免許証や財布への執着心が強く、手元にそれらが存在しないだけで衝動行為を多く認めた。【経過】自傷・衝動行為の抑制を目的として薬物療法を施行するも、リハビリ施行時の易怒性は改善しなかった。そこで、家族からの提案もあり、怒らずにリハビリできるたびに報酬として手帳に1000円ずつ記入し、お金が貯まれば欲しい物（バイク）が購入できるリハビリ貯金（架空）を実施した。その結果、攻撃性が改善し落ち着いて訓練実施可能となった。【まとめ】易怒性を有するリハ実施困難症例に対して、自己実現の欲求（リハビリ貯金）を用いて動機付けすることでリハ実施可能となった。欲求の階層構造の低位が利用不可能な場合、高位はより困難であるという通説にとらわれず、社会歴や現状をふまえ、残された判断力・自己認識力を利用したアプローチの有用性が示唆された。